



TITLE:

奇形歯の形態病理学的研究とくに
下顎大臼歯槌形根歯について(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

芦田, 佐仁

CITATION:

芦田, 佐仁. 奇形歯の形態病理学的研究とくに, 下顎大臼歯槌形根歯について. 京都大学, 1963, 医学博士

ISSUE DATE:

1963-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211080>

RIGHT:

【114】

氏 名	芦 田 佐 仁 あし だ さ じん
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 86 号
学位授与の日付	昭 和 38 年 6 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	奇形歯の形態病理学的研究 とくに、下顎大白歯槌形根歯について

論文調査委員 (主 査)
教 授 鈴 江 懐 教 授 美濃口 玄 教 授 岡 本 耕 造

論 文 内 容 の 要 旨

人の下顎大白歯では通常、近心側と遠心側の二つの歯根を備えるものを基本型とするが、時として、この2根が相融合して単根となる場合がある。そして、このような複根性から単根性への移行過程に、いわゆる槌形歯根なるものがみとめられるのである。すなわち、2根が、それぞれの頬側または舌側において種々の程度に融合し、その反対側では種々の深さの窩溝によって2根が隔てられているため、そのような歯根の外形が丁度、槌を思わすものであるところから命名されたものである。

ところで、槌形根歯に関する業績は現在までのところ寥々たるもので、とくに、その根管形態については未だ、明らかでない点が多い。

この度、著者は大阪歯科大学口腔病理学教室所蔵の槌形根歯 150 例を研究材料として肉眼的の一般的観察とともに、レントゲン像ならびに歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法による根管形態の観察を行ない、形態学的のみならず臨床、根管治療の実際に関連ある多くの興味ある知見を収めることができた。

つぎに、その概要を列記する。

- 1) 全症例とも計測値は総じて正常歯の標準値よりも下回っていたが、とくに、冠長が短かった。そして、舌側融合槌形根歯において一層劣勢であった。
- 2) 全症例のうち、頬側で融合するものが92.6%を占め、舌側融合を呈するものはきわめて少なかった。この事実は、奥村教授の著書に槌形根は舌側融合が多いと記されていることと一致しないし、また、藤田教授が外遊の途中アムステルダムに立ち寄り、往年の Bolck の研究資料を観察した時にも、やはり槌形根歯では舌側融合の多いことをみとめているが、それとも相反するものである。
- 3) 槌形根歯の歯種別の発現頻度は下顎第2大白歯83%、第3大白歯17%であった。
- 4) 完全融合を呈するものと不完全融合を呈するものとの比率は4対6であった。
- 5) 融合側の反対側における根分岐点は大多数が高位であった。
- 6) 肉眼的にみとめられる根尖孔の数は2個のものが多く(58%)、その開口部位は、中央部ないしは

頰側寄りが多かった。

7) 歯根の走行状態は垂直に向うものが多かった。

8) 歯冠、歯根の表面性状はおおむね正常であった。

9) 咬耗がかなり著明にみとめられるものが多かったが、それは槌形根歯でも相当長期の使用に耐えたことを物語るものと思われる。

10) Protostylid の発現が 50.7%にみとめられた。

11) レントゲン像では根管の真の形態を把握するには充分でなかった。

12) しかし、歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法は、根管の詳細なる像を知るためには現在としては、絶好唯一のものであり、それによって、根管形態の複雑な推移を究明することができたことは日常の歯科診療にきわめて有意義である。

13) 槌形根の成因は人類の進化に伴う歯の退化現象として2根の融合に基づくものとの説や、歯胚と顎骨の発育不均衡に原因するとの説など唱えられているが、むしろ、頰側が大きく、舌側が小さい第1と第3大臼歯間に、それらとは逆の頰側が小さく、舌側が大きい第2大臼歯が介在し、その歯根もまた舌側よりも頰側において接近していることと、Paramolarhöcker や Protostylid、およびそれらにつながる根の存在にも関連し、わずかな、なんらかの作用が動機となって、この種の槌形根を生ずるものと考えるのである。

ゆえに、槌形根は奇形歯の一種として、ことさらに特殊視することには、ためらいを感ずるものである。

論文審査の結果の要旨

人類の下顎大臼歯は、その近心側と遠心側に2根をもっているのがその基本形態と見なされている。ところが人類歯牙の進化過程における矛盾現象と解されているものに、この2根性のものが歯根癒合をいとなみ単根化せんとする奇形歯があり、その形状からしてこれを槌形根歯とよんでいる。そうしてこれは歯科解剖学上、人類歯牙の進化過程において第1大臼歯から第3大臼歯へとぜんじ矮小化を示す、歯牙自体の退行性変化にともない、歯根もまた同様の意味において2者が接近して、ついには単根性になるという。

そうして、その2根性から1根性に変化する中間移行型のあるのはとうぜんであるが、その典型的なものは槌状となるので、これを槌形根歯とよぶのである。

ところがこの槌形根歯についての研究はわが国ではりょうりょうたるもので、わずかに数氏をかぞえるのみならず、その症例数もいたって少ない。

そこで著者は長年にわたって蒐集された150例の下顎大臼歯の槌形根歯について、肉眼的、レ線的、ならびに歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法によって形態病理学的研究を遂行し、いろいろ注目すべき成績をおさめたのである。

ことにはなほ重要な新知見としては、いままで槌形奇形歯は舌側癒合が多いと成書にすら記載されているのであるが、それらは資料の不足によるもので、むしろ著者の豊富な材料では頰側癒合が92.6%にたつことが見出されており、これは特筆すべきことである。また槌形根歯は正常歯標準よりもつねに劣勢で、とくに冠長が短いとの成績も注目される。

その他なおいろいろの注目すべき成績がのべられているが、著者は奇形歯と特殊に取り扱われていた下顎大白歯の槌形根歯につき多数の症例を蒐集して貴重な観察をとげた結果、きわめて有意義な成績をおさめ、その成因にまで論及している。

以上により本論文は学術的に有益なものであり、医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。